

## 教育

生活ワイド

子が面白がる部分を中心に  
「読み合い」といふのは、どのようなものですか。

同じ絵本を開く中で、親が面白いと感じる部分と、子どもが感じる部分と、子どもが感じる部分を、ともに大切にする読み方です。

ここでは、通常の読み聞かせと違い、「大人」読み手、子ども「聞き手」という関係をこわす

ところから始まります。つまり、「この本は」う読む」「ここが面白いところだ」という、通常は読み手である親がもつ「決定権」をなくすのです。

同じ絵本を読んでも、大人が面白いと感じる部分と、子どもが楽しいと感じる部分が、違うことは多くあります。子どもが面白いと思う部分を中心にして読むくらいのつもりで、ちょうどいいと思います。

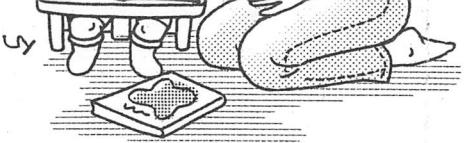
生まれてから、一番初期の親子の交流には、リズムによる交流、声を通じての交流、表情を通しての交流などがありまぐさ以前のコミュニケーションの回路づくり味が分かる・分からぬはそれほど重要ではない

# 絵本の「読み合い」通し 親子のふれ合いを

鳴門教育大学・佐々木宏子元教授に聞く

親子がふれ合う方法の一つとして、絵本の「読み合い」が注目され始めています。今回は、その考え方と具体的な進め方について、読み合いに関する著書をもつ、鳴門教育大学の佐々木宏子元教授に聞きました。





が、手遊びなどがあまり親子の間で遊ばれなくなってきたので、これらに代わって絵本を入り口にしてコミュニケーションをとっているとするものなのです。

「なぜ好きなのか」を考える

従来、手遊び、指遊び、子守歌などが、その役割を果たしてきました

ことによって生じる意外性に面白さを感じるよりも、ストーリーの論理を追ねうとしませんか。

また、親が教訓的な部分や結論にその本の魅力を感じても、子どもはそれには興味がなく、途中の絵の表情などを面白がることもあるでしょう。

—子どもが読んで理解が重要なのですね。そうです。よく「子どもと絵本の関係が分からぬ」という声が寄せられます。また、「どういう効果があるの?」という質問も多くあります。

—子どもが読んで理解することよりも、その反応が重要なのですね。そうです。よく「子どもと絵本の関係が分からぬ」という声が寄せられます。また、「どういう効果があるの?」といふ質問も多くあります。

このようなどき、親は、子どもの好きな部分について、「あなたと本は、どんな関係?」「どのような効果が?」と聞かれれば違和感があるのと同じで、関係や効果を気にするよりも、絵本を通して親子の交流が少しでも進めばうれしい、とられて挑戦してほしいですね。

# 「ミニミニーションの “入り口”として 家族によって 違う 楽しみ方

わが子への  
好奇心をもつて

をどう読むか、どこが好きになるのか、という好奇心をもって臨みたいですね。

—最後に、子育てに奮闘中のお父さん、お母さんにメッセージをお願いします。

赤ちゃんを、ただ世話するだけではしないですよね。わが子に関する新しい発見など、楽しさを見いだしたいものです。

読み合いの取り組みが、その入り口になればうれしいですね。少しずつでもいいので、読み合いを継続して行うことをお勧めします。

逆に、そうした楽しさをもなながら子育てに取り組めていれば、特に絵本を用いることにごだわらなくてもいいのです。

いざれにしても、肩の力を抜いて、子どもの

—「互いに楽しむ」「子どもの楽しめる点を確認する」ことが大事ですね。

はい。それ以外については、やり方や方法は家庭によって変わっていいのです。また同じ絵本を読んだとしても、家族によつて、その面白さが違つて当たり前と思います。

親は、子どもがこの本

読みながら子育てに取り組めていれば、特に絵本を用いることにごだわらなくてもいいのです。

●佐々木宏子著、新曜社刊、1995円(税込)

【参考図書】  
『絵本は赤ちゃんか